

## 新選組「復権」への系譜

— 司馬遼太郎の歴史構築 —

續谷真紀

### 一 はじめに

幕末期に徳川幕府の警察部隊として活躍した新選組は、維新動乱後も生存者や関係者たちの回想などで細々と語り継がれて来た。新選組は、映像作品や大衆文学などの物語題材として取り上げられることが多い反面、倒幕派の敵・維新の「敗者」として「悪役」という役割を与えられることが多かったが、司馬遼太郎は、短編小説集『新選組血風録』(一九六二・五—一九六三・一二)『小説中央公論』連載/以下『血風録』・長編『燃えよ剣』(一九六二・一一—一九六四・二三)『週刊文春』連載)によって、そのようなイメージを一新させる。また、司馬は「血に飢えた人斬り集団」という新選組のイメージを払拭しただけではなく、自らの作品によって読者の中から多くの新選組愛好者を生み出し、さらに、その愛好者たちの中に、今まで存在しなかった層を生み出した。それが司馬の作品(本稿では、「司馬の作品」と記した場合、『燃えよ剣』と『血風録』を示すものとする)の中の「虚構」の部分

を明確にするため、司馬以前に新選組を取り扱った史料に戻り、新選組の「史実」を探ろうとする層である。司馬の作品によって新たな新選組の「語り」の土壌が生まれたことは注目されて良い。端的に言えば、司馬は、今まで受動的に幕末維新の「語り」を受け取るだけであった「語り」の受容者(読者)たちが、「語り」の内容に批判的視線を向け、主体的に過去の言説に立ち戻っていく現象を引き起こしたのである。

「敗者」であるが故に「語り」を抑圧され、歴史学でも検証されることが比較的少なかった佐幕派の中でも、新選組は急激なイメージの変遷を辿ってきた。司馬の作品が世に出る前は、「血に飢えた人斬り集団」というレッテルを貼られ、同時代の人々に「壬生狼」と呼ばれるなど、強い負のイメージで見られる集団であった。やがて、司馬の作品の効果で次第に「復権」を果たし、人気を集めるようになる。

『燃えよ剣』と『血風録』は、新選組愛好者の多くが新選組に興味を持つきっかけ(後にテレビドラマ化されたものも含めて)か、あ

るいは新選組に興味を持った多くの人間が読む作品と言われる<sup>(4)</sup>。共に一九六二年に連載開始され、一九六五年に『新選組血風録』が、一九七〇年に『燃えよ剣』がテレビドラマ化されるにあたって爆発的な人気を呼び、作品の中心人物である土方歳三や沖田総司の墓には愛好者が殺到するなどの混乱が引き起された<sup>(5)</sup>。新選組というよりも、司馬が構築した新選組像・土方像・沖田像が多くの読者を魅了したという方が正しい。皮肉にも、司馬の影響で急増した新選組愛好者たちが始めた研究は、今まで「史実」とされ、司馬も参照した子母澤寛の著作の「否定」、そして、多くの愛好者たちが新選組への入り口とした司馬の作品の「否定」の作業でもあった。司馬の物語だけで満足しなくなった読者たちは、あくまでも司馬は新選組への入り口であって、物語は「史実」を知る上での妨げになるものと見なすようになったのである。本稿では、新選組の歴史に関する事項に限定して「歴史小説」における「虚構」と「史実」（事実）という言葉を用いていきたい<sup>(6)</sup>。また、「史実」を「同時代史料で確認できる事項、または、関係者の後世の記録・談話に記された事項で同時代史料と齟齬・矛盾が見られないものであることから、事実であると認定できる事柄」、「虚構」を「同時代史料などに記載がなく、後世の人間が新たに創作したことが明らかとなった事柄」と定義する<sup>(7)</sup>。その上で、司馬遼太郎の作品が読者たちを魅了した要素と、新選組の表象の系譜における司馬遼太郎の位置づけを確認したい。

## 二・維新の「敗者」の「語り」——司馬遼太郎以前——

近代は、佐幕派の「復権」の歴史でもあった。新選組を含めた、佐幕派の「語り」は様々な形態をとって行なわれる。網淵謙錠は、「昭和三年（一九二八）をピークとするブーム」「明治百年にあたる昭和四十二年（一九六七）をピークとする、見方によっては現在もその余波の中に入っている、比較的長期にわたるブーム」という二つの「維新ブーム」があったと語る<sup>(8)</sup>。網淵の言う「維新ブーム」の一九二八年は、子母澤の「新選組三部作」（以下「三部作」）の最初の著作である『新選組始末記』（以下『始末記』）が八月に万里閣書房から刊行され（その後、一九二九年六月に万里閣書房から『新選組遺聞』、一九三一年二月春陽堂から『新選組物語』が刊行／以下「遺聞」「物語」、佐幕派の古老の語りを多く集めた「戊辰物語」（万里閣書房から一九二八年五月に『戊辰物語』として書籍化）が年始から『東京日日新聞』に連載されたという年でもあり、佐幕派が注目され始めた時期であった。尾崎秀樹が「明治維新が現代史から歴史に変わる過渡期であり、維新史そのものも体験の素朴な告白から歴史記述へ、そして解釈へと大幅に移ってゆくときであった」と指摘したように<sup>(9)</sup>、佐幕派の「語り」が注目されたのは、戊辰戦争から六〇年経過することで、維新の動乱の非体験者が多くなり、幕末維新が「過去」から「歴史」へと変貌し始めたことも関係している<sup>(10)</sup>。維新の「敗者」の「語り」の起源は明治初期まで遡る。大久保利謙は、『佐幕派論議』（吉川弘文館、

一九八六・五、54～60頁）で、明治初期と明治二十年代に起こった「歴史ブーム」について触れている。それによると、明治初期には、明治政府による官撰維新史が刊行され、政府が敵方の幕府側を「賊」とし、政府の立場を「正当化」させる記録が出されたのに対して、明治中期からは、旧幕府側であった人々の回想録や手記が大量に刊行されるようになったという。<sup>(11)</sup> 他にも佐幕倒幕を問わず、幕末の動乱の体験者が体験を語り合う「史談会」が発足（一八八九年）し、後に『旧事諮問録』（一八九一―一八九二年、旧事諮問会）として編纂されていく質問会が開始（一八九一年）される。幕末動乱の体験者たちはこれらの「語り」の中で、個々の体験を客観視していった。

大正期になると、大衆文学のジャンルの中で、幕末維新期を題材にすることが流行する。<sup>(12)</sup> 著名な作品としては、中里介山『大菩薩峠』（一九一三年から『都新聞』などで連載）、白井喬二『富士に立つ影』（一九二四年から『報知新聞』で連載）、大佛次郎『鞍馬天狗』（一九二四年から『ポケット』などで連載）などが挙げられるが、この時期は、幕末維新期という時代が背景に後退し、架空の主人公と登場人物が織り成す架空の物語が多く見られた。更に時代が下って、昭和初期の「（維新ブーム）」では、再び幕末維新の「実像」を知るための試みが行なわれるようになる。昭和期における幕末維新の「語り」は、体験者が自己の体験を記す明治期とは異なり、非体験者が体験者の経験を聞いて、それを編纂していくという特徴も生まれた。

成田龍一は、『歴史』はいかに語られるか 1930年代「国民

の物語」批判』（日本放送出版協会、二〇〇一・四、22頁）で、聞き書きした著作の「叙述のスタイル」を「ゆるやかな筋をもつもの、断片Ⅱエピソードの集積という形式であり、文体も統一されずに「談」が要約して記されたり、子母澤自身の談話取材のドキュメントや史料のそのままの提示もおこなわれている」と指摘する。「戊辰物語」や子母澤の著作は、語り手の語る地の文と古老の談話との境界線が曖昧であるところに特徴がある。だからこそ古老が想起するままに体験を次々に語りだしているという雰囲気強くする効果があったとも言えよう。昭和初期は、子母澤の他にも平尾道雄『新撰組史』（発行者は平尾、一九二八・八）、服部之總『新撰組』（『歴史科学』一九三四・九）などの新撰組研究があったが、これらは歴史の流れそのものを追う研究であった。子母澤は、新撰組の構成員を焦点化したのである。

戦後になると、幕末維新期の非体験者が、大衆文学などでそれぞれ自分の幕末維新像を構築していくことになるが、司馬遼太郎は、新撰組のイメージ特にその中でも「悪役」とされた土方のイメージを一転させる。単に新撰組や土方の「復権」を行なったという<sup>(13)</sup> だけでなく、新撰組に新たなイメージ・解釈を付与し、固定化されがちであった従来の新撰組に対する視点を多様化させたという役割も果たしていた。では、司馬はどのように新撰組像を構築したのか。

## 三、新選組像の構築——土方歳三と沖田総司の「発見」——

司馬は子母澤との対談「幕末よもやま」で、新選組を描こうとした時のことを振り返り、「『新選組始末記』がどうしても越えられない」「どうしても『始末記』を離れられない」と子母澤の『始末記』に影響を受けたことを語っている。<sup>14</sup> 司馬はこの他にも、新選組副長・土方歳三の故郷の縁者（土方の姉の直系の子孫）が残した家伝『離陰史話』や、新選組一番隊組長・沖田総司研究者である森満喜子が執筆途中であった『定本沖田総司おもかげ抄』（新人物往来社、一九七五・一一）の初稿を見たことが明らかとなっている。<sup>15</sup> 後に触れていくが、土方の「冷酷」な側面を示す挿話が多い『始末記』と、故郷の縁者の視点から見た人間的な土方を垣間見せる挿話を集めた『離陰史話』、沖田の研究書『定本沖田総司おもかげ抄』という特徴の異なった資料を主に参照して、司馬は新選組観を構築していったことになる。司馬は、網淵謙錠に新選組の作品を書くように薦められた時、近藤の「粗野な出世主義」に「嫌悪感」を持っていたが、次第にその「思い込み」の成否を確かめるために、新選組を調べ始めたと言っている。<sup>16</sup> そして司馬は新選組を調べるうちに「新選組は、文化史的にいつて、日本の組織の最初ではないか」（新選組局長・近藤）勇が新選組の総帥にはなったが、（土方）歳三が副長として組織を切り盛りした」（括弧内引用者）という考えを抱くようになった。<sup>17</sup>

『燃えよ剣』が、土方を新選組の中心人物として、彼の生涯に沿っ

て新選組の興亡を描いた縦の物語であるのに対し、『血風録』は、中心人物を限定せずに新選組の全盛期（京滞在時代）に的を絞り、様々な隊士（新選組構成員のことを「隊士」と記す）たちの視点から新選組の組織の特徴や人間模様を描いた横の物語となる。<sup>18</sup>

特に『燃えよ剣』では、子母澤が描いた土方歳三の「冷酷」な側面を表す部分が削除された。中村政則は、「司馬の美学が歴史の事実の選択を恣意的で、作為的なものにした。日本人にとっては辛くて暗い事件は意識的に切り捨てようとした」とし、「『剣よ燃えよ』の土方歳三が尊攘派の志士の拷問に関わった事実を書かなかった」ことに触れている。<sup>19</sup> 子母澤の「三部作」や、二番隊組長・永倉新八の回想録『新撰組顛末記』（新人物往来社より一九七一年一〇月刊行）で紹介されている、池田屋事件前の倒幕浪士に対する土方の苛烈な拷問は、『燃えよ剣』では削除された。その他にも、金銭を管理する勘定方の河合者三郎が五十両を紛失したことによって、斬首という極刑を下す（物語）で紹介される）などの〈冷酷な粛正者〉としての土方を表す挿話も削除される。『燃えよ剣』では、土方が新選組を強力な組織にすることに徹し、「みなに憎まれてい」という記述はあるものの、憎悪を買う原因となった具体的な行為はほとんど描かれず、土方に対して肯定的な語り手の基本的姿勢に、読者も取り込まれていくのである。総長・山南敬助の脱走事件と「局中法度」<sup>20</sup>を犯したがための山南の切腹の場合も例外ではない。子母澤の著作は、土方との権力争いに破れて脱走し、最後に土方に「九尾の狐」（物語）と言って切腹した

山南に対し、土方を「悪役」とするように演出していた。一方『燃えよ剣』では、山南の脱走が、土方の「本音」を引き出す契機となっている。山南脱走の直後、土方は沖田に向かって心中を次のように明かした。隊長の近藤を「神仏のような座」に置き、副長である自分が「すべての憎しみをかぶる」ことで、「烏合の衆」としての新選組を「ばらばらに」させないようにしている、「副長が、隊士の人気を気にしてご機嫌とりをはじめるとき」に、隊長の近藤が「にがい命令」を下すようになり、「隊はばらばら」となる―これを、〈冷酷な肅正者〉である彼の本音として、司馬は提示したことになる。司馬は、参照した二つの史料―『三部作』と『籬陰史話』―から浮かび上がってくるそれぞれ異なった土方像（前者は〈冷酷な肅正者〉、後者は〈人間的な人物〉）から、〈冷酷〉「非情」を演じていた人物と土方をとらえ直すことで、〈根は人間的な人物〉という土方のイメージを構築したのである。土方の人間的側面に焦点を当てたものとしては、池波正太郎の「色」という作品が『燃えよ剣』より前にあったが、土方の「人間性」のみが焦点化され、「人間性」と「非情」を混合させた司馬の人物像とは異なっていた。<sup>(22)</sup>

野口武彦は、司馬の『燃えよ剣』が「伝統的な土方像を一新」したことに触れ、「作中の土方がただ新選組のマネージャーであるだけだったら、あれほどの大衆的な人気は得られなかったらう。その冷酷な土方歳三が最後に『剣』の人として箱館郊外の戦場に斃れる結末が、当時の読者にはたまらぬ『男の美学』だったのだ」と指摘する。実際

の土方の最期は、部下を指揮する途中で流れ弾に当たって戦死したとされているが、司馬はそれを、「新選組副長土方歳三」と名乗って、単身で敵陣に斬り込み、複数の銃弾を受けて戦死する場面に作りかえた。「新選組という、日本史上にそれ以前もそれ以後にも類のない異様な団体をつくり、活躍させ、いや活躍させすぎ、歴史の無類の爪あとを残しつつ、ただそれだけのためにのみ自分の生命を使い切った」<sup>(25)</sup>土方の最期は、特定の人物を狙っていない「流れ弾」で戦死したことにするわけには行かなかったのだろう。司馬は、自分の創造した土方像にふさわしくするために、史料に記された事柄を「美化」したのである。

『燃えよ剣』は陰の存在であった土方に脚光を当てた作品であるが、逆に、土方以外の隊士に焦点をあまり当てなかった作品でもある。局長の近藤勇は、局長としての自分が土方に作られていた存在であることに気づいて、最後に倒幕軍に投降していく受動的な人物となっている。戊辰戦争終結時まで土方に従った相馬主計という隊士に到っては、戊辰戦争の途中で脱走したという「不名誉」な挿話が創り上げられた。一方、新選組の断片的な挿話を綴った『血風録』では、近藤の内面が掘り下げられている他、職務に実直な監察方の山崎丞・飄々とした三番隊組長の齋藤一・倒幕派に寝返る五番隊組長武田親柳斎・人望が集まらない七番隊組長谷三十郎など、主に幹部職についた隊士たちの性格が詳細に描かれる。その点で『燃えよ剣』と『血風録』は、相互を補完しあった作品であると見ることができるといえる。

しかし、『燃えよ剣』の中で、沖田総司には例外的に強い個性が与えられた。司馬は近藤・土方の故郷の「生まれついで闘争心、反抗心」に触れ、「その野趣は、最初はひどくグロテスクなものに感じました」と語り、「沖田総司という若者を、自分なりにこうだろうと思っ創って見たのは、このグロテスクな森に自分が足を踏み入れてゆくための、道作りの手斧の役つもりでした<sup>(26)</sup>」としている。自分が新選組構成員たちの「グロテスク」なところに踏み込む際に、「救い」を与えてくれる存在として沖田をとらえていたのである。『燃えよ剣』の中の沖田は、山南に「神様とか諸天とかがこの世にさしむけた童子」と評価され、土方が唯一心を許せる存在となっている。『血風録』でも「剣術錬磨者にありがちな偏執的性格をいささかもっていない」「無欲すぎる」青年とされた。近藤や土方と異なり、沖田は写真が現存していない（容姿は後世の人間の想像力に委ねられる）。さらに、結核で夭折したということも相俟って、司馬以前から、彼を「美剣士」とする作品は存在した。<sup>(27)</sup>『燃えよ剣』でも「育ちがいいから、言葉がいい。ちよつと色小姓にしたいような美貌である」と沖田の優れた容姿が強調され、さらに「無欲」「童子」という少年のように無邪気なイメージを付与された。司馬の沖田は、明朗であることが強調されるために、結核による夭折という彼の運命がより悲劇的なものになる。子母澤の著作で伝えられる沖田は、「何時も元気で、戯談ばかり云っている」（『遺聞』）人物である一方で、不祥事を起こした隊士の腕首を押さえて、「二三間も突き飛ばし」、襟首をつかんで畳の上に顔をこ

すりつける（『遺聞』）荒々しい人物であったが、司馬は、沖田のそのような側面を削除し、「元気で、戯談ばかり云っている」箇所のみを膨らませたのであった。

司馬が「道作りの手斧」として造型した「無欲すぎる」沖田像は、一時期の新選組愛好者の中では、土方以上に反響を呼んだようである。<sup>(28)</sup>司馬の『血風録』『燃えよ剣』は、それぞれ一九六五年、一九七〇年にテレビドラマ化され、主要な隊士の墓には「墓参の人が少しずつ増えはじめ」、「ついに爆発的といつていい増加現象をおこすようになる。司馬の影響で墓参者が急増した沖田の墓は、一九七四年以降、一般参詣禁止の処置が取られたほどの混雑が見られた。この反響は、司馬には「予想外」であったろう。沖田の墓の前に置かれた、墓参者が自由に書き込みみできるノートには、沖田の魅力として、「純粹」を揚げる声が多く、<sup>(30)</sup>いかに司馬の沖田像が、新選組愛好者たちに影響を与えたかがわかる。司馬が、従来のイメージと現存する史料の中から「発見」した土方像と沖田像の反響は大きかった。沖田は写真が現存していないことから、容姿が自由に想像できること、土方は「眼もとの涼しい顔で、役者のようだった」とされる写真が現存しているということも、より新選組を「美化」する傾向に拍車をかけたのである。

#### 四．司馬の読者たちが生み出した「語り」

司馬は、二つの作品によって新選組を個性豊かな人間が集合した組

織であるということを読者に提示した。では、それを読者たちはどのようなに享受していったのだろうか。「新選組ブーム」の源流は、司馬の作品をもとにして作られたテレビドラマ『新選組血風録』と『燃えよ剣』であったと横山登美子は指摘する。横山は『血風録』について、「いままでのチャンバラ調でなく、新選組隊士の人間ドラマとなった」と指摘し、放映局に多くの反響があった話を紹介している。釣洋一も「新選組の副長土方歳三のイメージは、司馬遼太郎氏の『燃えよ剣』によって培われ、テレビタレント栗塚旭によって決定づけられた」としており、実際に、新選組研究家の経歴や前に触れた隊士の墓前のノート<sup>(35)</sup>を見ても、司馬の作品だけではなく、ドラマから興味を持ったという声がいくつか見られる。ドラマが小説の未読者も取り込み、「新選組ブーム」によってさらに愛好者が増加していったのであった。

新選組の研究書を多数刊行している新人物往来社は、一九七一年から新選組関連の書籍を刊行するようになる。同時代史料や小説、子孫の手記の他には、一九七二年に釣洋一が『始末記』『燃えよ剣』などの「虚構」を検証した『新選組再掘記』が刊行された。以降、以前から沖田を研究していた森満喜子、一九七〇年代後半以降は菊地明、伊東成郎をはじめとして、愛好者から出発した新選組研究者の研究書を刊行する。彼等が刊行した研究書の内容は、新発見史料、同時代史料の検証や「三部作」の検証、司馬の創作箇所<sup>(36)</sup>の確認、子母澤が詳述しなかつた戊辰戦争時代の新選組の研究などが主である。司馬以後は、このような研究者たちが、主に子母澤が新たに作り上げた「虚構」の

部分を指摘して、何が「史実」かを検証するという新たな「語り」の土壌を形成していった（小説である司馬よりも、史料の形態を取る子母澤の方が対象になることが多い）。研究の中では、主に同時代史料や関係者の回顧録・談話と照らし合わせて、それらと矛盾・齟齬が生じた「三部作」の記述を「虚構」とする方法が取られている<sup>(36)</sup>。

司馬の作品によって急増した新選組愛好者たちは、創作の世界を否定して「実像」に迫ろうとし、さらに、司馬がもとにした「三部作」の「虚構」部分を指摘し、批判する「語り」を始めたのである。それらの研究の中では、皮肉にも（山南敬助切腹の前の恋人明里との別れ）や〈局中法度〉や〈山崎丞が池田屋事件の直前に葉屋に変装して密偵をした〉など、小説の中で頻繁に用いられる「三部作」の挿話の中には、「虚構」である可能性が高い話が多いことも明らかになった<sup>(37)</sup>。

野口武彦は、「ファンの一部は沖田総司像の形成過程を探って、テレビドラマから司馬遼太郎の原作へ、さらには子母沢寛の源流へとさかのぼり始めていたのである」と、「史実」を知ろうとして、司馬遼太郎から子母澤に遡及していった新選組愛好者について触れている<sup>(38)</sup>。「墓前ノート」からも、墓参する新選組愛好者たちの多くは、司馬の作品やテレビドラマに飽き足らなくなり、『始末記』などを読むようになる場合があることが確認される<sup>(39)</sup>。司馬は、自分の作品だけではなく、参考とした子母澤の「三部作」に読者を引き込む役割も果たしていたのであった。新選組（佐幕派）の語りの系譜の中で、司馬が特異なのは、ただイメージを一新して独自の新選組像を構築したというだ

けではない。従来の幕末維新の「語り」の機能は「語られなかった事柄を語る」「幕末維新を背景にした「大衆文学」を執筆する」というだけにとどまっていた。それに対して司馬は、自分の作品の読者たちが、自身も参照した史料に立ち戻ってそれらを読むという現象を起こしたのである。つまり、司馬の時点で、読者たちは過去の語りへと遡及し、過去の語りから「虚構」を見出し、「史実」とされていた「虚構」を抜き取った新選組の歴史を構成するという新たな「語り」の分野を作り上げた。司馬の「虚構」に対する批判も少なからず出ている<sup>(40)</sup>が、司馬が創作した「虚構」は、「史実」を疎かにするものではなかったのである。

司馬の読者たちの多くが子母澤の著作などへと遡及していったのは決して偶然ではなかった。司馬は子母澤寛や森満喜子の著作をはじめ、前掲の『戊辰物語』などの過去の研究書、司馬が実際に調査した隊士の子孫の談話、隊士の書簡、隊士や同時代人の手記など、自分が執筆に際して参照したであろう史料を時折引用（またはその史料に言及）している<sup>(41)</sup>。その中には、「三部作」の中で引用・参照されている史料も含まれているが、司馬もまた、「三部作」からその参照史料へと遡及して、新選組関連史料を調査した可能性が窺える箇所でもある（典拠となった書名は省略されて筆者の名だけが記されることも少なくない）。単に「史実」に「虚構」を混ぜたのではなく、作品執筆にあたり、この史料を司馬自身が参照したことを読者に提示することで、読者が「史実」を知ろうとする欲望を喚起する装置が作品に仕

掛けられていたことになる。司馬が参照した史料を読むことで、新選組や幕末に関する知識を得た読者は、どれが「虚構」であったかある程度判別可能となり、以前とは異なった角度から作品を眺めることができる。作品内に張り巡らされた史料からの引用によって、読者たちは作品の「舞台裏」を知りたいという欲望を抱き、史料へと導かれていったのである。司馬の作品内に、あらかじめ読者が遡及していく要素は含まれていた。

司馬の作品は、「史実」であるかのように「虚構」を語る箇所がある。『血風録』『池田屋異聞』では、監察方の山崎丞が旧赤穂浪士の奥野将監の子孫であると設定され、宿敵に勝利した時に先祖の名を叫んだという架空の挿話が「なぜこんなことを言ったのか、筆者にもその気持がよくわからない」「わからないままに、書きとめておく」と、実話のように語られる。『燃えよ剣』に登場する土方の架空の「恋人」・お雪に至っては、「のちに紅霞という号で多少の作品を、京、東京に残している」「横浜で死んだ。（改行）それ以外はわからない」「明治十五年の青葉のころ、函館の称名寺に歳三の供養料をおさめて立ち去った小柄な婦人（お雪／引用者）がある」とされ、他にも語り手が実際に聞いた談話であるかのように語られる架空の談話がいくつも紹介される。「虚構」をあたかも「史実」のように演出していく文体も、読者の「史実」への欲望を掻き立てるものであっただろう。「史実」と致命的な矛盾を生じさせない程度に、「史実」の背後に「虚構」を加え、「史実」を改変した上で、読者を「史実」と「虚構」とを判別



する欲望へと勧誘する作品の特質が、読者を史料へと遡及する行為に誘ったのである。

## 五．おわりに

新選組は「史実」を伝える史料が数少ないこと、貴重な資料とされていた子母澤の「三部作」に、あたかも「史実」のように語られた「虚構」が多いということなどから、伝説と「虚構」に彩られてきた組織であった。司馬は新選組を題材にする時、史料から「自分の解釈にとつて都合のいい箇所」を取捨するだけではなく、自己流の解釈・想像を「あたかも本当であったかのように」付け加え、歴史を構築して行った。「虚構」の多い司馬の作品が直接的・間接的原因となつて、新選組が多くの愛好者を獲得することになった現象は、「民衆」は「赤裸な事実の忠実な報告」を求めず、「自分の歴史を歴史家の手でなく、詩人の手で書かれることを欲している」というハイネの言葉<sup>(42)</sup>を連想させる。

司馬の作品によつて愛好者が急増したのは、作品の内容だけではなく、背景的な理由もある。司馬自身が『血風録』『燃えよ剣』を連載する二年前に『梟の城』で第四二回直木賞を受賞したことなどによつて、司馬が本格的に注目されるようになっていたこと、テレビドラマでも放映されたため、原作を読んでいた層までもがドラマによつて興味を持つようになったこともその要因であろう。

司馬と、その源流となつた子母澤の著作の「虚構」の部分を見出す

る作業がある程度進んだ現在は、同時代の史料の中から、「新事実」を発見して語る研究、「虚構」のはずの子母澤・司馬の作品の挿話が、「意外にも」事実であつたことを明らかにする研究も生まれている。<sup>(43)</sup>  
一九七〇年代前後の沖田ブーム終了後、愛好者たちの注目が漸く主人公の土方に集まり、土方を中心に新選組の歴史を辿る書籍が近年増加傾向にある。司馬は未だに愛好者へ強い影響を与えていると言えよう。<sup>(44)</sup>

新選組の「語り」は、生存者や関係者などによつて、公表されなかつた史料や伝承が伝えられ、読者がそれによつて新たな事柄を知るといふ形を取つていた。しかし、「敗者」であつたがために、歴史教科書や官撰の著作物の中で語られることはなく、市井の人々が細々と語り継いでいくものであつた。「語り」を行う者が語る新事実を読者が受容するという、一方通行の「語り」の形態であつたのである。そのような中に登場した司馬は、新選組を「虚構」によつて「美化」することで、多くの新選組愛好者を生み出した。そしてその読者たちが、「虚構」である司馬の作品（または「語り」）に疑問を抱き、相対化しようという試みを始めるために、司馬より以前の「語り」のテキストに遡及していった。司馬だけではなく、子母澤などの「史実」とされていた「語り」の絶対性を取り払い、同時代史料を検証しながら、より新選組の「実像」に近づこうという試みを始めていく。司馬の新選組の作品によつて、受動的に情報を得るだけであつた読者たちは初めて能動的に「史実」とされていた記述に疑いに向け、「虚構」の部分

を見つけ出すという行動を起こしたのであった。これらは司馬を「否定」する作業のように見えるが、司馬の作品の中にこそ、読者に「史実」を知る欲望を喚起させる装置が仕掛けられていたのである。司馬を「否定」し、卒業していった読者たちは、一方で司馬の装置によって「史実」への遡及へと導かれていた存在でもあった。

- 註1) 「新選組の映画の歴史」(釣洋一・秋山忠彌・河合敦『映像で見る新選組』学習研究社、二〇〇三・一一二、82頁87頁) 参照。
- (2) 網淵謙錠「解説」(司馬遼太郎『新選組血風録』中公文庫、一九七五・一一、634頁)
- (3) 子母澤寛『新選組遺聞』の「壬生屋敷」の「八木為三郎老人壬生ばなし」に「京都の町の人が、 $\angle$ 壬生狼壬生狼 $\angle$ とって、身凛いしていた」という話がある(斜線部は改行を示す)。
- (4) 今川美玖&別冊ダ・ヴィンチ編集部・編『ダ・ヴィンチ特別編集 4 土方歳三 副長「トシさん」かく描かれき』(メディアアフアクトリー、二〇〇三・一〇、58頁)「土方歳三コミック&小説102本「偏愛」レビュー」で執筆者の一人・長屋芳恵は、『燃えよ剣』によって新選組愛好者になる読者が多いことに言及している。
- (5) 森満喜子『定本沖田総司ーおもかげ抄』(新人物往来社、一九七五・一一、202頁203頁)に詳しい。
- (6) 司馬遼太郎は『歴史と小説』(河出書房新社、一九六九八)の「歴史小説と私」などで、歴史を扱った自分の作品を「歴史小説」としているため、本稿では歴史を扱った作品をこの名称で統一する。
- (7) 新選組研究の中では、「虚構」と「史実」がこのように認識されていると分析した上で、筆者が定義したものである。例えば釣洋一『新選組再挿記』(新人物往来社、一九七二・一一)や菊地明『新選組101の謎』(新人物往来社、一九九三・三)では、子母澤の「三部作」など

の新選組関連書籍の記述の正否を、同時代史料や時代背景と矛盾・齟齬を来たすか否かという視点で検証している。

- (8) 注(2)の前掲書、627頁。新選組評価の推移や「維新ブーム」は、大久保典夫『大衆化社会の作家と作品』「Ⅲ「新選組」と時代小説」(至文堂、二〇〇六・一一)でも論じられている。
- (9) 尾崎秀樹『大衆文学の歴史』上(講談社、一九八九・三、172頁)
- (10) このことは、木下直之「第2章 上野戦争の記憶と表象」(矢野敏一・木下直之・野上元・福田珠己・阿部安成『浮遊する「記憶」』青弓社、二〇〇五・九)などに詳しい。
- (11) 明治初期から中期にかけての佐幕派の回顧録などについては、前掲の大久保利謙『佐幕派論議』、田中彰『明治維新観の研究』(北海道大学図書刊行会、一九八七・三)などに詳しい。
- (12) 大衆文学と幕末維新との関係は、注(9)の前掲書に詳しい。
- (13) このことは従来の先行文献で何度も指摘されてきた。例えば、神谷次郎『燃えよ剣』のヒーロー(新人物往来社編『土方歳三の世界』新人物往来社、一九七八・一、26頁27頁)では、「不当にその人間性を無視されてきた」土方が『燃えよ剣』によって「生きた命脈」を与えられたことを詳細に論じている。
- (14) 司馬遼太郎・子母澤寛『幕末よもやま』(『中央公論』一九六七・八、258頁)
- (15) 土方の姉の子孫・佐藤豆が『維陰史話』をもとにして執筆した「聞きがき新選組」(新人物往来社、一九七二・九、表紙の折り返し部分「燃えよ剣」の史料)、前掲『定本沖田総司おもかげ抄』「あとがき」にそれぞれ司馬が参照したことが記される。
- (16) 司馬遼太郎『網淵謙錠氏のこと』(網淵謙錠『苔(たい)』の「解説」中公文庫、一九七七・一一／引用は『司馬遼太郎全集』第五〇巻、文藝春秋、一九八四・九、522頁523頁)。
- (17) 司馬遼太郎『奇妙さ』(『新潮現代文学』46 司馬遼太郎 燃えよ剣書下ろしエッセイ奇妙さ)新潮社、一九七九・五、444・448頁)
- (18) 斯波司・万代修『新選組ブックガイド』(新人物往来社編『新選組の

すべて」新人物往来社、一九八一・五、158頁）でも『燃えよ剣』『血風録』をそれぞれ「縦の糸」「横の糸」としている。

(19) 中村政則『岩波ブックレットNO. 427 近現代史をどう見るか―司馬史観を問う』（岩波書店、一九九七・五、60頁）

(20) 子母澤寛の『始末記』に、新選組は「士道ニ背キ間敷事」「局ヲ脱スルヲ不許」「勝手ニ金策致不可」「勝手ニ訴訟取扱不可」「私ノ鬭争ヲ不許」という五箇条の「局中法度」を掲げていたという記述がある。違反者は切腹という罰が与えられた。

(21) 「色」(『オール讀物』一九六一・八)。

(22) 司馬はこの二つの作品より前に新選組四番隊長・松原忠司を主役とした短編「壬生狂言の夜」(『別冊週刊朝日』、一九六〇・一一)がある。子母澤の『物語』で紹介される、土方が松原を追いつめ、自害に追いやる挿話を題材とした作品で、後の長編作品にはない土方の「冷酷な肅正者」としての面を浮き彫りにしていた。

(23) 野口武彦「新選組の遠景」第七章 北辺に散る」(集英社、二〇〇四・八、284頁)

(24) 土方の最期の様子は、「立川主税戦争日記」(『新選組資料集コンパクト版』、新人物往来社、一九九五・三 所収、258頁)などに詳しい。

(25) 司馬遼太郎『燃えよ剣』あとがき(『燃えよ剣』文藝春秋新社、一九六四・三／引用は『司馬遼太郎全集』第32巻、文藝春秋、一九七四・四、473頁)

(26) 「足跡 司馬氏自身による自伝的断章集成」(『文藝春秋 臨時増刊 司馬遼太郎の世界』、一九九六・五／引用は前掲『司馬遼太郎全集』第32巻、522、523頁による。全集における題は「年譜」)

(27) 「美剣士」としての沖田像は、永田哲朗「美剣士沖田総司像形成過程の研究 映像篇」(『歴史読本』一九九九・一一)に詳しい。

(28) 新人物往来社から刊行された『別冊歴史読本 新選組原論』(二〇〇一・九)の編集部「新人物往来社版『新選組本』一覽」の題名を見ても、一九七〇年代に、隊士個人を取り上げたものは、沖田総司が圧倒的に多い。

(29) 注(5)と同じ。引用は202頁。参詣禁止の件は同書を参照。

(30) 「専称寺」沖田総司ノートより(『新人物往来社編 沖田総司のすべき込みを収録したものであるが、「今の世の中でこれほど純な人がいるのでしょうか?」(中略)光のように純粹に!!」(五月二十日)「心のままで、総司のような純粹さを持てるように、努力を続けたいと思います」(六月一日)のように、沖田のイメージとして、「純粹」という言葉がしばしば用いられる。このことは注(23)前掲書の「第三章 沖田総司伝説」でも指摘される(99頁)。

(31) 注(25)と同じ。引用は474頁。沖田の資料の少なさを天逝から容姿への想像が広がることは注(23)前掲書の「第三章 沖田総司伝説」(111、114頁)などでも指摘される。

(32) 横山登美子『燃えよ剣』を観る」(『KAWADE夢ムック 文藝別冊 新選組 幕末に咲いた滅びの美学』(河出書房新社、二〇〇一・六、137頁)。「新選組ブーム」は、横山の用いた用語を引用したものであるが、新選組研究の中では一般的に用いられる言葉である。

(33) 前掲『新選組再掘記』

(34) 藤堂利寿「新選組「研究者」列伝」(注(28)前掲書)

(35) 注(30)に前掲の資料、土方の墓前ノートである「石田寺ノート」(前掲『土方歳三の世界』)

(36) 新選組研究における主な研究方法に関しては注(7)に前述。また新選組書籍刊行年は注(28)の資料を参照。

(37) 子母澤の「三部作」の「虚構」の問題については、前掲の『新選組再掘記』、前掲『新選組1001の謎』などに詳しい。

(38) 注(23)前掲書の「第三章 沖田総司伝説」(100頁)

(39) 新人物往来社編『沖田総司の世界』(『新人物往来社』、一九七四・二)の「専称寺ノート」には「司馬総司に疑問」を感じて『始末記』を読み始めたという言葉(三月三十日)、前掲『沖田総司のすべて』の「専称寺」沖田総司ノートより」には「司馬遼太郎氏やその他の作家の作り上げた虚像を愛しているのではないだろうか」(六月二十二日)という言葉

業もあり、野口武彦も前掲書の「第三章 沖田総司伝説」でこれらの言葉を用いて、司馬から子母澤に遡及していく読者について指摘している(100頁)。他にも、「専称寺「沖田総司ノート」より」には「司馬さんの小説の沖田総司が好きでただであって、実際の沖田総司のお墓参りするのはオカド違いかもしれません」(七月二十五日)など、司馬の「虚構」に影響されていることを自覚する言葉がいくつも見られる。注(34)の経歴から、新選組研究者も同じ路線を辿る場合が多い。

(40) 例えば、佐高信は読者の好むような人物・物語を作る司馬を批判し(佐高信・関川夏央・井上ひさし・小森陽一「大衆文学 戦後篇」松本清張、司馬遼太郎、藤沢周平が描く円環―『すばる』、二〇〇一、263頁)、中村政則も前掲の論のように司馬の「歴史の事実の選択」の問題に触れるなど、司馬の「史実」と「虚構」の問題点は様々に論じられている。

(41) 福井雄三『司馬遼太郎の「意外な歴史眼」』(株式会社主婦の友インフォス情報社、二〇〇八、49頁)では司馬の歴史小説の特徴の一つとして「作者の随想」(「余談」)などの他に、本稿でも触れている作品内の司馬の資料提示のことを指摘している。本稿ではあくまで司馬の『燃えよ剣』『血風録』を新選組の言説の系譜の一つとして捉え、新選組の小説の中で生まれた「特異な」語り方としたが、福井は司馬遼太郎の歴史小説全体に共通する特徴としている。また、向井敏『司馬遼太郎の歳月』の「駭蕩たる「余談」」(文藝春秋、二〇〇〇、八)や成田龍一『司馬遼太郎の幕末・明治』「竜馬がゆく」と『坂の上の雲』を読む(朝日新聞社、二〇〇三、5、46、47頁)などでは、司馬が物語に挿入する「余談」について論じられているが、これらの引用もそのような「余談」を含むことがある。

(42) ハインリヒ・ハイネ、鈴木健三・鈴木和子訳「ミュンヘンからジェノバへの旅」(木庭宏編『ハイネ散文作品集』第2巻、松籟社、一九九〇、139頁。同書302、303頁の木庭宏による「作品解題」によるとこの作品は一九三〇年ホフマン・ウント・カンペ社から「旅の絵」に収録されて刊行された)尾崎秀樹『大衆文芸地図 虚構の中にみる

夢と真実』(桃源社、一九六九、九)3頁でもハイネのこの文を引用している。

(43) 「新事実」を発見する研究は、菊池明『新選組の舞台裏』(新人物往来社、一九九八、三)や伊東成郎『土方歳三の日記』(新人物往来社、二〇〇〇、七)などで行なわれている。「虚構」が「意外にも」事実であった例としては、前掲『土方歳三の日記』「加納惣三郎伝説」で、『血風録』に登場する加納惣三郎という隊士が、吉田喜太郎『維新史蹟図説』(一九二四、一)という挿話集に登場していることから、司馬が創作した人物ではなかったと考察されていることなどがある。

(44) 注(28)前掲「新人物往来社版『新選組本』一覽」によると、一九九〇年代から、隊士個人を扱った書籍は沖田よりも土方の方が多くなっているが、一九七〇年代の沖田の書籍ほど多くは出ていない。

\*本稿の『燃えよ剣』の引用は『司馬遼太郎全集』第6巻(文藝春秋、一九七一、九)、『新選組血風録』の引用は『司馬遼太郎全集』第7巻(出版社同前、一九七二、一)、『新選組三部作』の引用は『新選組始末記』(中公文庫、一九七七、三)以下出版社同じ)、『新選組遺聞』(一九七七、四)、『新選組物語』(一九七七、五)によった。同時代史料では「新選組」「新撰組」の二通りの表記が用いられている(前掲『新選組101の謎』参照)が、本稿では「新選組」で統一した。文献の書名が「新撰組」である場合は、その表記とする。本稿の「新選組三部作」の名称は、前掲中公文庫の『始末記』「物語」の尾崎秀樹「解説」で用いられる名称を用いた。

〈付記〉

刊行時期の関連で本稿では触れることが不可能であったが、最近の『燃えよ剣』『血風録』の論として、本稿でも触れた、子母澤と司馬の沖田像や『血風録』の隊士の個性に言及した、中村稔『新選組血風録』と子母澤寛『新選組始末記』(『司馬遼太郎を読む』青土社、二〇〇九、一八)、『燃えよ剣』と「公」と「私」の問題等を論じた成田龍一『戦後思想家としての司馬遼太郎』第二章「幕末維新期への関心」(筑摩書房、二〇〇九、七)などの論考があることを記しておきたい。